

築地市場と小池知事

写真上は『現代思想』7月臨時増刊。「築地市場」が特集されており、読みごたえがあった。写真下は『建築ジャーナル』8月号、特集「築地礼賛」。リードから一築地市場は美しい。美しいのには理由がある。大きくカーブした鉄骨トラス構造はパリのオルセール駅（1900年、現在はオルセー美術館）やモネが1877年に描いたサン・ラザール駅に見られるトレイン・シェッドと呼ばれる大架橋だ。床は江戸小紋のようなピンコロ石の波模様。そんな東西の出会いと時間の蓄積を背景に人が生きているエネルギーの炸裂する建築が築地市場なのだ。戦後72年、日本は経済的には豊かになったのかもしれないが、こんな美しい場所が東京に存在することを許すだけの豊かさが、今の東京にほしい。



朝日新聞8月2日社説に、築地市場と小池都知事に関わることを書かれており紹介したい。

東京都の小池百合子知事が就任して、きょうで1年になる。先月の都議選では支持勢力が議会の過半数を占めた。「都民本意の都政」「都民に開かれた都政」という自らの公約の実現に向けて盤石の態勢を確立した形だが、ここまでの歩みを見ると大きな疑問と不安がある。

知事はこの間、任命した外部顧問らとの間で重要な方針を決める手法をとってきた。たとえば市場移転問題だ。知事は6月20日、突然「築地は守る、豊洲を活かす」を基本方針として発表した。その4日前に知事も出席して開かれた都の「市場のあり方戦略本部」の最終報告では、まったく議論にのぼっていなかった話だ。会合をネットで傍聴していた都民は「両立」など想像しなかったに違いない。それは都庁幹部も同様で、発表直前まで知らされていなかったという。基本方針に関与した顧問らはその後、豊洲には「一時移転」するだけだと、ツイッターなどで繰り返し発信している。一方で、知事もメンバーである都の幹部会議では、副知事が豊洲を市場として「継続的に」運営すると報告し、了承された。市場関係者や都民は戸惑うばかりだ。姿勢をあいまいにしたままの知事の責任は重い。

知事は従来の都政をブラックボックスと呼んで批判した。だがこれでは新しいブラックボックスが生まれただけで、都民への説明責任を果たしていない点で変わらないではないか。市場に関する基本方針を表明した直後、築地で業者らと面談した知事は「最大の問題は都の顧問行政だ」と指摘された。この直言を重く受け止め、2年目に臨まなければならない。

(2017年8月8日)